

自らの立場を強固なものにし大きな力を社会に発揮することになる（図1）。

ところで、地主層は300~1000町歩の巨大地主、50~300町歩の大地主、10~50町歩の中地主、5~10町歩の小地主、3~5町歩の在村耕作地主に分類できる。巨大地主は銀行や鉄道会社の発起人になり、貴族院議員に選ばれるなど県の名士といえる存在だが、地域社会からは遊離している。しかし、300町歩以下の大地主は地域社会に密着するだけでなく、農会や地主会などを組織し県全体での横の広がりをもち、10町歩以下の小地主や在村耕作地主が村政の実務を担う形で、地域社会をローカルな視点から見るだけでなくグローバルな視点で見て、地域振興のためになんらかの事業を興しうる立場にあった（新潟県、1988、12~13頁）。

『新潟県大地主名簿』（農政、1968）で六日町の地主として記載されているのは、腰越家、遠藤家、高橋家、今成家の四家である（図2）。今回紹介される映像は、この地主の高橋家と今成家のものである。

まず、今成家の19代目、無事平（1837~1881）であるが、今成家は江戸時代年寄役を務めるなど由緒ある家柄である。今成無事平は明治に入ってから戸長、学区衛生取締役、徴兵議員となり、村会議員、県会議員も務めている（図3）。なお、今成新吾は無事平の弟である（図4）。

図1、1924年地主数

府県	地主数
新潟	263 (40)
秋田	212 (22)
宮城	161 (22)
山形	122 (13)
青森	107 (14)
茨城	106 (4)
熊本	102 (7)
埼玉	81 (2)
福島	80 (4)
岩手	73 (4)

（ ）は50町以上の地主

中山清『巨大地主経営の史的構造』より

図2、六日町の大地主（地価）

1929年当時の当主	1888年	1916年	1929年
腰越 ハツ	13,300	14,433	14,813
遠藤 利一	9,800	6,550	5,536
高橋 捨松	7,700	23,182	15,762
今成 隼一郎	5,500	5,925	5,175

『新潟県大地主名簿』より

## はじめに

2009年2月7日におこなわれる「地域映像の力―新潟からの情報発信とアーカイブ構築をめざして」の展覧・上映イベントでは、新潟県六日町を舞台に活躍した四人の映像の制作者たちを紹介することになった。明治初期に湿板写真を試みた今成無事平・新吾、明治末から大正期にかけて1,200枚もの乾板写真を撮った高橋捨松、そして昭和十年代に9.5mmで映画をつくった平賀洗一、ここではこの四人のパイオニアの人となりとその背景となる六日町の文化について粗描する。

これらの映像の先人たちが、六日町という極東の国日本の一地域で、写真、映画という欧米から移入された近代のメディアをどう受容し、創造したのか。それを読み解くにあたって4つの観点から考えてみたい。1つは地主文化であり、2つは江戸時代から続く文人仲間のネットワークであり、3つは川舟文化の存在であり、4つは反権力的な自主独立の気風である。

## 1. 新潟における地主のあり方

新潟は近世、東北地方南部から信州にかけての地域を背景に、さまざまな物や人、情報が行き交う場所であった。1868（明治元）年には、三府五港の一つとして位置づけられ、日本海側としては唯一外港として開かれていた。また、現在の県域は、江戸時代においては高田藩、長岡藩、新発田藩他8藩、ならびに天領・預地など入り組んだ地域であったが、1871年の廃藩置県によって新潟・柏崎両県に統合され、佐渡は相川県に入ることになり、さらに1876年にこの3つの地域は統合される。

農業が中心だったこの時代において、1877年に新潟県は全国の米の約5%を生産し全国一の生産高をほこるだけでなく、各種の農家の副業による産物も多く、1888年の人口は約166万人で総人口の4%を占め、日本で一番居住者の多い都道府県でもあった。

一方で、明治政府によって進められた1873年の地租改正、1881年以降の松方デフレ政策によって、1890年代以降新潟において地主制が確立する。新潟県は全国一地主が多く、江戸時代に力を蓄えていた地主名望家層は、



図3、今成 無事平

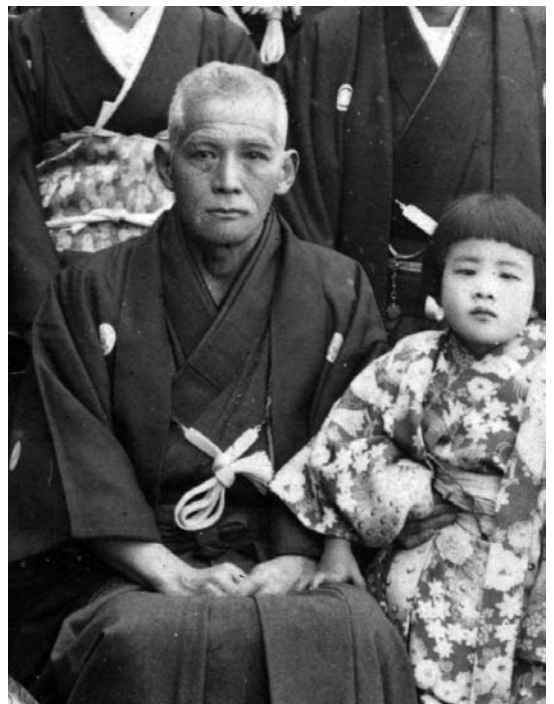


図5、高橋 捨松



図4、今成 新吾（32歳） 1872年4月15日写

高橋捨松（1863~1930）は（図5）、高橋家の10代目であるが、地域経済の旗振り役として、船会社、酒造、金融業など幅広く事業を展開し活躍している（図6）。図2で見るとおり、高橋家は正統時代に入り家産を殖やし、高橋捨松が地域経済の中で大きな役割を果たしていたことは見て取れる。

これに対して、平賀家はこうした大地主ではなかった

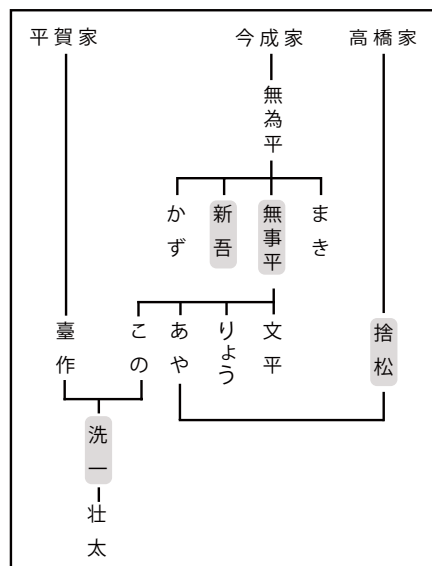
が、江戸時代末には中之島村柄沢（塩沢町）で漢方医を営んでおり、平賀洗一の父平賀臺作（1871~1930）は東京で医学を勉学の後、1899年六日町病院に迎えられ、後に病院を開業した。資産家であったことは間違いないが、平賀洗一（1902~1980）が生まれたころは必ずしも、病院の経営は順調ではなかったようだ（図7）。平賀洗一は東北帝国大学医学部を卒業後、北海道旭川竹村病院に勤務し蓄財した後、1931年11月に六日町に戻り、開業している。その後、六日町の地域文化人として町の行事やイベント（雪上運動会など）を企画する（図8）だけでなく、演劇、絵画、考古学などさまざまな分野で活躍する。

なお、この3家は仲町通りをはさんでご近所同士の関係であると同時に（図9）、互いに親戚関係でもある（図10）。

## 2. 豪雪と文人仲間

「凡雪九月末より降はじめて雪中に春を迎、正二の月は雪尚深し。三四の月に至りて次第に解、五月にいたりて雪全く消て夏道となる。（中略）されば雪中に在る事凡八ヶ月、一年の間雪を看ざる事僅に四ヶ月なれども、全く雪中に蟄るは半年也。」（鈴木、[1841] 1970）（図11）

六日町のある魚沼地方は豪雪地帯として知られ、一年のうち5~6ヶ月を雪の中で暮らす。越後縮や、草鞋、雪中道具などの藁細工などが冬の副業として発達する



大雪の年は両側の家の屋根の雪を通りに  
するために大通りもこんなになった。

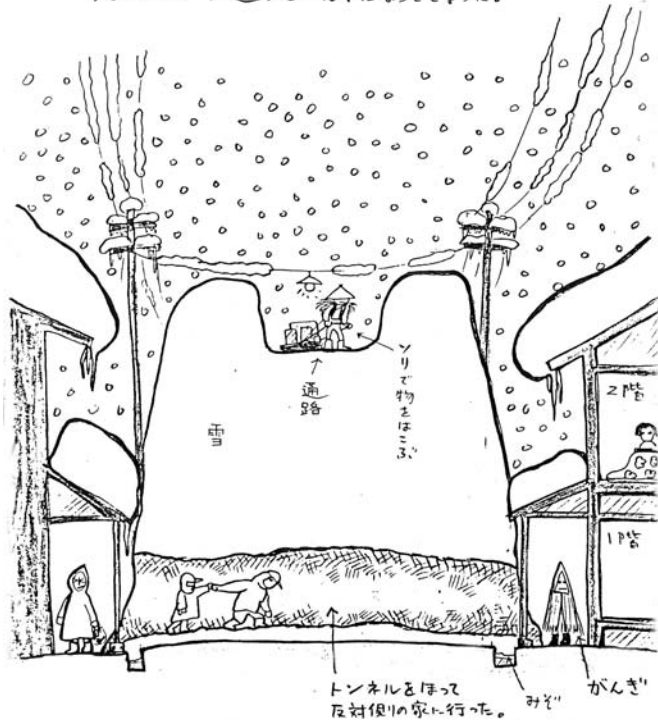


図 11、平賀壮太「お父さんの子供の頃の話」より

だけでなく、越後名物「女郎と三助に女工」と呼ばれるように、江戸時代から杜氏や湯屋の三助など冬期の出稼ぎで知られていた。当然であるが、出稼ぎという現象には、地主制の発達と共に多くの小作農の貧窮化という事態が反映している。

ところで、『北越雪譜』を書いた鈴木義三治こと俳号鈴木牧之は、六日町の隣町塩沢に生まれている。鈴木牧之の父恒右衛門は越後縮の仲買業を営みのちに質屋も営んだ商人であった。牧之は姉（この）が今成家に嫁いだこともあり、今成家に商売の仕方を習いに行っている。また、恒右衛門は俳句をたしなみ俳号牧水とし、文人としての交友関係をもっていた。鈴木牧之も父に習い、俳句を読むだけでなく、さらに山東京伝や滝沢馬琴、十返舎一九など江戸や大阪の文人との幅広い交遊関係をもった。

今成無事平も詩文和歌発句を好み特に狂文狂句を得意としたが、平賀洗一の父平賀臺作も俳句を好み俳号蛇足堂と号し、『日本及日本人』、『ほととぎす』などに投稿し、夏目漱石、高浜虚子などと伍して入選している（南魚沼、1971、下 798-799 頁）。俳句はこうした地域の地主名望家層の冬の楽しみであり、同時に地域を越えてさまざまな人びととつながるネットワークのツールでもあった。

今成家に残されたさまざまな写真に関連する資料や書簡をみると、すでに江戸時代から培われた俳人仲間のネットワークを通して、新しい写真仲間のネットワークが形

成されていることが分かる。今成無事平はこの仲間を通して東京に遊学にでたおり、カメラや現像のための道具を購入するだけでなく、写真術の要諦につき講習を受けている。なお、免許皆伝が大鐘より 1870 年に授けられている（図 12）。

ところで、今成無事平と新吾の写真を見ると、二人が股旅者になったり、侍になったり、さまざまな役を演じながらお互いに被写体になっている様子が分かる。雪に閉じ込められた世界での遊興のあり方が、写真からほのみえてくるようだ。高橋捨松も忙しい事業のかたわら、写真にうち興じたものと思われるが、写真に傾ける秘かな情熱を通して、そこに雪国の精神生活が感じられる。

金子隆一は、今成無事平・新吾、高橋捨松の写真を評して、写真館のようなまい写真ではなく、「へたな写真」だという。つまり、それは写真館のように技術的にうまくないだけでなく、パターン化された被写体の撮り方と違ったユニークな眼差しがあり、それが独特な雰囲気写真を写真に付加させていることを指している。これは、写真史でようやく現れた写真なのだ。そこには移入された洋物の写真の模倣ではない、日本の生活や社会に深く関わったところで出てくる奇妙で、何かリアルを伴った感覚がある。では、その感覚は、一体どこからくるのだろうか。

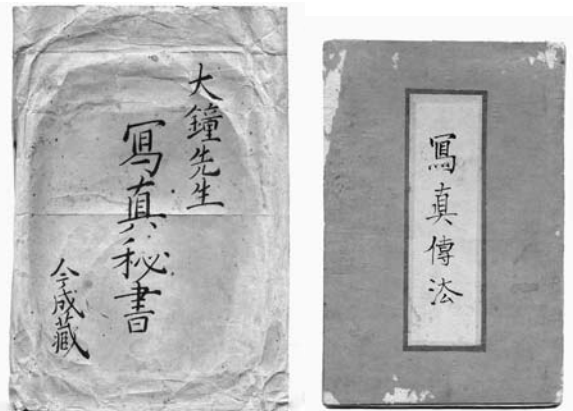


図 12、写真の現像関係の文書『写真秘書』1866（慶応2）年4月、ならびに『写真伝法』1870（明治3）年6月6日

### 3. 舟と異端の美学

江戸時代、六日町は江戸と新潟を結ぶ三国街道に面しているだけでなく、魚野川から信濃川を下り日本海へと出て行くことができる、街道の陸運と舟の水運との中継地点であった。そこは、参勤交代の諸大名のみならず、行商人や旅芸人、遊興の文人学者などが往来する、物と情報が行き交う場所でもあった。





図 13、14、高橋家所有の運搬船 高橋 捨松・写



図 15、船乗り（推定）高橋 捨松・写

魚野川を利用した荷物の輸送は古くから行われていたが、江戸時代になると上田舟道として塩沢（上十日町）、六日町、浦佐、小出、堀之内、川口、長岡へと着く舟道が定着した。六日町から長岡への下り舟は朝 8 時頃に六日町を出て、夕 5 時頃には長岡に着いたが、上り舟は 4 ～ 5 日かかり、時に 7 日かかることもあった。

この川舟航路は江戸時代、六日町の遠藤家（丹後屋）が全権を掌握していたとされるが、明治に入り自由競争の時代となり、1880 年長岡商会在六日町舟を買い占め、定期航路を確立した。しかし、1902 年には高橋捨松、遠藤利作が長岡商会から舟を買い戻し、再び六日町の有志によって運航することになった（図 13・14）。舟の積荷は、下り舟には米や木呂（ころ）や杪（ぼい）などの薪や、木炭、ぜんまいなどの魚沼の物産と客であり、上り舟には干し魚などの海産物、塩、日常雑貨品などを積んだ。

明治から大正にかけ隆盛を極めた舟運送は、1923 年に上越線が宮内から塩沢まで開通し、さらに 1925 年には湯沢まで開通するとその荷と客は急激に減り、ついに消えることになる（南魚沼，1971，上 722～724 頁）。

ところで、水深が浅いにもかかわらず、流れが急で、雪解けなどで増水する魚野川は舟運送するには適しているとは言にくい難所をいくつかかかえた川であった。舟に乗り組む人間は時に命がけであり、日頃から信仰を重んじ、縁起をかついだ。また、その仕事は荷揚げや、上り舟では川につかり舟を綱で引っ張るなど、重労働であった。そのためもあってか、食事は白米に魚や肉を炊き込むなどして食べた。大正初期まで魚沼地方の人びとは四足を食べることはなく、こうした舟者は地域のなかで明らかに特殊な生活者であった（磯部，1991，251～254 頁）。

また、その服装も通常は、半股引に紺のきゃはん、つまかけわらじ、冬は真蓑（まみの）を着用したというが、夏はほ

とんど裸に近かったうえ、冬も下は何も着けなかった。これは褌をして水につかれば、上がった時、褌が凍ってしまうからだ。舟子たちは水に浸かった後、火を焚き、鞆丸をもみ、陰茎をこすりして暖め凍傷にかからないようにする必要があった（磯部, 1991, 239-240 頁）。(図 15)

舟運に関わる人びとは明らかに異形の人びとであった。今成無事平・新吾の写真を通覧すると裸姿の男性が多く現れるが、これらは衆道的な文化意識を反映したものというより、舟運に関わる人びとの文化や生活感覚を反映したものだろう（図 16）。どちらにしても、今日では失われたこうした文化や独特な雰囲気、これらの写真に明らかに写されているだけでなく、地主名望家であった今成無事平・新吾が写し撮ろうとしていた点に六日町文化の層の厚みがある。

#### 4. 開拓とユートピア

ところで、南魚沼の田地は魚野川やその支流に形成された扇状地などにあり、その多くは 17 世紀以降、新田開墾が行われ、米作が本格化したところでもあった（六本木, 2002）。この地域は、江戸時代、1679-1681 年の越後騒動により高田藩から天領となり、1720 年代には幕府領会津藩預り地となっており、幕府と会津藩との中間的な支配にあり、地主名望家層の自主独立性が発揮されやすい条件をもっていた。荒地や氾濫原を開拓し、新たな社会を創造しようとする気風をもった地主名望家層の意欲に支えられて、地域の文化も展開した。



図 16、今成無事平・写

明治初期の今成家、大正期の高橋家、昭和初期の平賀家の映像を通覧すると、共通した独特な意識、含みが感じられる。それは、地域のコミュニティとその文化を担っているという気概だけでなく、自らの浄土をこの世に現出させようとするユートピアイズムがある。

しかし、いままでみてきた今成家や高橋家と違って、平賀家は、大地主でなかったこともあり、地主制が生み出す社会的な矛盾に鋭敏にならざるを得ない位置にあった。平賀洗一は長岡中学校から仙台の第二高等中学校に進学したが、二高時代から社会主義研究会に所属し、1923-26 年に新潟県北蒲原郡木崎村（現豊栄市）でおきた小作争議の応援にも参加している。さらに、東北帝大医学部に在学中に、無産者新聞配布したことで逮捕されている。しかし、その後は、敗戦後の 1946 年 3 月 15 日に六日町の共産党細胞をいち早く結成し、活躍するまで目立った活動はない（桑原, 2002, 34-38 頁）。



図 17、『へぐらじま』より

平賀フィルムは、この活動の空白の時期、1935-1938 年にかけて集中的に製作されている。内容的には地域の行事・イベントや、家族を撮ったものが多くを占めるが、もう一方で、女性美を追究した『流れ』（1936）、『海女 へぐらじま』（1937）、『光の魚』（1938）の 3 部作がつくられる（図 17）。1931 年に日本政府は満州事変を起こし中国へ侵出し、1937 年 7 月 7 日には蘆溝橋事件によって、中国との本格的な戦争を開始する時期に、こうした作品を製作しようとするその姿勢には、あきらかに反時代的なものがある。また、『流れ』では五十沢の山奥の溪流をヨーロッパのある水辺に見立て、沐浴をする女性を撮るという美的なモチーフ（図

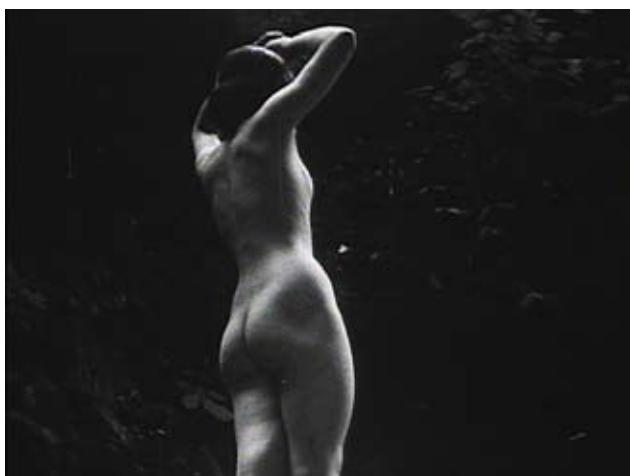


図 18、『流れ』より

18) には、美を装った反権力的な意志が揺曳している。またそれが、作品に一定の美的緊張感も生み出してもいる。

一方、今成家は戦中、占領期にかけて農場開拓を試みているだけでなく、当主今成拓三は南魚沼郡の大政翼賛運動の中心人物として活躍するだけでなく、敗戦後、ビルマ独立の国家代表主席であったパー・モウの日本亡命の引受先となっている。

六日町は陸の孤島と見えながら、明らかに外と内とが交差する国家の辺境として位置し、新たな政治的ビジョンを胚胎しようとする複雑なジグザグ運動を起していたのだ。

## おわりに

六日町の4人の映像制作者の世界をたどっていく時、今まで我々が知っていた写真史や映画史の姿は一変する。

そこには、黒々とした暗みと乱反射する光を浴びる山や川があり、思ってもみないような、想像したことがないような人びとの生活や姿が浮んでくる。これらの写真と映画は、かつて鈴木牧之が『北越雪譜』で描いたような雪国の生活とその心の世界を、その地域に住まうものだけが語りえる相貌をもって表出する。

新潟の地に散在するだろう、こうした消し去ることのできない痕跡は、先人たちの生きた証であり、我々にとっての歴史的、文化的な遺産でもある。それは過去と未来をつなげ、ローカルからグローバルへとつながる環を浮かび上がらせてくれるものだ。

人びとは雪の中で、何を思い、何を成し遂げたのか、目を凝らし、立ち止まって、耳を澄ませば、声が伝わってくる。我々は、時に、立ち止まらなければならない。そして、またそうした過去の声に響き合うようにして、生きる必要がある。

アーカイブとは、新たな未来を創ろうとする時、必要な過去を見つけ出すツールだ。我々は次の一步を踏み出すために、先人たちの生き方、知恵に学ばなければならない。

## 【引用参考文献】

- 磯部定治『魚沼の明治維新』恒文社、1991年
- 桑原春雄『南魚沼先駆けの群像 1 日本共産党の人々』桑原春雄、2002年
- 鈴木牧之「雪蟹」『校註 北越雪譜』野島出版、[1841] 1970年
- 中山清『巨大地主経営の史的構造』岩田書院、2001年
- 新潟県『新潟県史 通史編 7 近代二』新潟県、1988年
- 農政調査会『新潟県地主資料第拾集 新潟県大地主名簿』農政調査会、1968年
- 南魚沼郡誌編集委員会『南魚沼郡誌 続編 上巻』新潟県南魚沼郡町村会、1971年
- 南魚沼郡誌編集委員会『南魚沼郡誌 続編 下巻』新潟県南魚沼郡町村会、1971年
- 六本木健志『江戸時代百姓生業の研究——越後魚沼の村の経済生活』刀水書房、2002年



